

# 高等学校外国語（英語）における効果的な音読指導法の研究

## —ペアワーク等を取り入れた音読活動を通して—

田 村 総 子<sup>1</sup>

発信力の育成は英語教育における課題の一つとなっている。そこで本研究では、ペアワーク等を取り入れた効果的な音読指導法を研究し、発信力の基礎を築くことを目指した。内容理解を深めながら音読ができる教材を開発し、音読形態を工夫した。また、内容を相手に伝えることを意識した音読を段階的に指導して、チームで発表活動を行った。その結果、新出語彙や文構造の知識定着が促され、授業中の声を出す意欲が向上し、相互学習による効果も見られた。

### はじめに

平成20年1月に中央教育審議会から出された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」の中で、「単に受信した外国語を理解するにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』の育成」を重視することが打ち出された。今回の研究では、英語Iの授業で単元内容を理解しながら発信力の基礎を築く授業づくりに取り組んだ。

### 研究の内容

#### 1 研究の背景

##### (1)新学習指導要領

平成21年3月に高等学校学習指導要領が改定され、これまでの「英語I」「オーラルコミュニケーションI」の選択必履修制を改め、新しく「コミュニケーション英語I」が必履修科目として設定された。この科目は、発信力育成を目指し、「4技能を総合的に育成するための統合的な指導を行う科目」と示されている。

##### (2)事前アンケート・事前学習定着度調査

所属校で、1学年3クラス110名を対象に、英語学習についての意識を尋ねる事前アンケート及び新出語彙や文構造知識・内容理解について、事前学習定着度調査を行い、現状について把握した。事前アンケートで、4技能の中で何が一番できるようになりたいか、の質問について、80%の生徒が「話す」「書く」ができるようになりたいと回答した。しかし、実際に英語を使って表現してみたいと思うかどうか、の質問についての肯定的回答は47%にとどまり、さらに、自分で音読することについて、肯定的な回答は約30%しかなかった。

1 神奈川県立秦野曾屋高等学校

研究分野（言語活動の充実 外国語（英語））

このアンケート結果から、発信できるようになりたいという気持ちはあるが、実際には、話し合ったり意見を交換したりすることだけではなく、テキストを声に出して読むことにも抵抗を感じていて、実際に発信することについては消極的であることが分かった。また、事前の学習定着度調査では、表現力だけでなく、語彙や文構造の知識定着も確実ではなく、基礎的な学習事項の定着についても課題があることが分かった。

#### 2 研究テーマの設定

こうした課題を踏まえ、声を出す抵抗感を緩和させ、発信する意欲を向上させる取組みを通して、発信力の基礎を築くことを目指した。本研究では、発信力の基礎を「発信しようとする意欲の向上と、そのための基礎的な学習事項の定着」と捉えることとした。

声を出す自信をもたせ、発信へつなげる取組みとして、声を出す機会を増やすことが重要だと考え、音読活動を取り入れた授業づくりを実践することにした。課題を解消し、発信へつなげられるよう、相手に伝えることを意識した音読についての段階的指導法と、ペアワーク等、それに関連した活動について研究を進めた。加えて、音読活動の時間を確保しながら内容理解を深め、同時に、新出語彙や文構造の知識定着を図ることができるような工夫も計画した。その結果、本研究のテーマを次のように設定した。

相手に伝えることを意識した音読の段階的指導法や、関連する活動の工夫について研究し、授業を通して声を出す意欲を高め、新出語彙や文構造の知識定着を促すことで、発信力の基礎づくりを目指す。

#### 3 音読の効果（先行研究の整理）

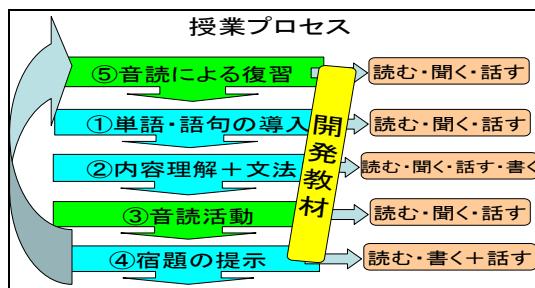
従来、音読指導の主な目的は、スムーズに発声させることにあるが、ここで、最近明らかとなったほかの音読効果について先行研究を整理する。門田(2007)は、

人は黙読するときも単語のつづりを見て、長期記憶にある情報の中から、その語のつづりを検索し、心の中でその語を音声化してから意味を理解する、という単語認知のプロセスを経ていることを明らかにしている。鈴木（2009）は、文章理解を速く行うにはそのプロセスの高速化が必要であり、多様な方法で繰り返し行う音読はそれを可能にすると述べ、安木（2010）は、多様な方法を用いるためには、指導順序を考えることも必要だ、と述べている。また、七野（2006）は、内容理解後の繰り返しの音読が語彙・フレーズ・構文の再生に有効であり、特に成績中位群や下位群に対して効果があったことを実証している。さらに、土屋（2004）は、音読は「スピーキングのトレーニングをしながら言語の基礎的能力を養成するためのものである。」と述べている。

これらの先行研究から、音読活動は、滑らかに音読できるようになることだけではなく、内容理解、語彙や文構造の知識定着等、言語の基礎能力に対する効果も期待することができる。したがって、本研究では所属校の現状を踏まえ、英語学習について自信のない生徒に対する工夫を施し、多様な方法で繰り返し音読活動ができるような授業づくりに取り組んだ。

#### 4 研究の手立て

##### （1）授業プロセス



第1図 授業プロセス

先行研究を踏まえて、第1図のような授業プロセスを組み立てた。すなわち、音読を中心とした活動を通して、声を出す活動から始まり声を出す活動で終わるという授業を構成した。また、音読活動だけではなく、内容理解や文法指導についても、単語から、意味のまとまりとしての語句単位であるチャンク、そして英文へと段階を踏んだ指導を行い、読む・聞く・話す活動を中心にながら、書く活動も取り入れた。

①の単語・語句の導入は、フラッシュカードを用いて発音させ、語彙を視覚と聴覚の情報と結び付けられるようにした。②の内容理解では、英文教材を使用し、文頭から順番に内容を理解させ、意味のまとまりで語彙を定着させられるように配慮した。文法指導も意味のまとまりを意識して行うこととした。③の音読活動は、内容理解の後に行わせ、内容理解を伴う音読を目指した。④の宿題では、音読活動で扱った英文を声に

出しながら書かせ、⑤の復習でも音読活動を行わせ、学習内容の定着を促せるようにした。

##### （2）授業を実践するための工夫

ここで、音読活動を中心とした授業を行うに当たって取り入れた活動について整理しておく。

第1表 授業内の活動

音読活動	音読を支える活動
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペアを組んで、立って音読</li> <li>・傾聴と相づち</li> <li>・パラレルリーディング</li> <li>・リピーティング</li> <li>・シャドーイング</li> <li>・音読ライティング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小チーム内のペア交替</li> <li>・チャンクを意識した、文頭からの内容理解</li> <li>・単語カードや、チャンクカード並べ替え</li> <li>・フラッシュカード</li> <li>・サマリーの暗唱発表</li> <li>・暗唱発表後のコメント</li> </ul>

繰り返しの音読活動を中心とした授業を展開し、単元の内容を理解させながら、発信力の基礎を築くことを目指して、第1表の活動を取り入れた。

授業プロセス③・⑤の音読活動のほとんどは、ペアワークで行った。四人一チームで、チーム内で互いにパートナーを替えてほかの三人とペアを組む形態を取り入れた。この形態を活用することで、複数の人と効率よくペアを組んで、音読活動を繰り返すことができ、少人数の活動を通して、声を出すことへのプレッシャーを緩和することもできる、と考えた。同時に、発信力の基礎づくりのための学び合いを小チーム内の活動に期待した。また、全てのペアワークは立って行うことで、お互いの声を聞き合う距離をつくりやすくし、相手に伝えることを意識した双方向の音読ができるようにした。

さらに、チームごとの暗唱発表会を設定することで、基礎的学習事項の定着を促し、発表をやり遂げたという達成感により声を出す意欲を更に高めることを目指した。暗唱発表後に英語でコメントを加える活動は、学んだ知識を活用し、自らの考えを発信しようとする姿勢を引き出すことを目指した。

土屋（2004）によると、発話は意味のまとまりである「チャンク」単位で構成されていることが明らかにされている。単語を一語一語ではなく、意味のまとまりであるチャンク単位で活用できるように、チャンクを意識した取組みを、音読活動だけでなく内容理解、文法確認でも行うこととした。加えて、チャンクを意識した内容理解と、チャンクからセンテンスへと段階を追いながら相手に伝えることを意識した音読活動が、単元の要約であるサマリー音読で展開できるように、教材を開発した。

授業では、読む・聞く・話す活動が中心となるので、書く活動を補い記憶の定着を促進する活動として、音読筆写の宿題を課した。これは、ペアワークで音読した英文を声に出しながら3回書いた後、暗唱できたかどうかを試し、その後、更にもう2回英文を声に出し

ながら書く活動である。宿題提出率は約90%であった。

## 5 検証授業

### (1) 検証授業の概要

所属校において、検証授業を以下のとおり行った。  
対象生徒：第1学年（3クラス）  
使用教科書：Power On English I（東京書籍）  
単元名：Lesson 7 *So Many Countries, So Many Laws*  
内容：様々な法律について学び、その背景を知る。  
授業時間：6時間

### (2) 段階的指導を取り入れた活動内容

音読指導、文法指導、内容理解について、第2表に示したような段階的指導を、単元にある三つのパートで、開発教材を用いて1時間目から5時間目に実施した。

音読指導では、内容理解を行ったパート全体を一斉の形態で、リピーティングやパラレルリーディングで音読した後、サマリーについて、教材を用いて音読活動を行った。チャンクからセンテンスへと段階に分けて指導し、生徒は、Stage 1については一斉の形態のまま活動を行い、Stage 2以降はペアを交替しながら活動した（第2図）。ペアワークでは、聞き手は読み手を見て、“Really?” “Exactly!” 等の相づちを返しながら音読を聞くように指導した。また、次の時間には、復習として、ペアの形態でStage 5からStage 7を行い、さらにそれ以降の授業では、一斉の形態でリピーティングやシャドーイングでサマリーの復習音読を行った。

新出文法についてもチャンクを意識し、単語カードを黒板に貼って行った。第2表①から③までは、教科書や教材は閉じたままで一斉の形態で行った。黒板に単語カードを貼って文法確認をした後、それらのカードを参考に並べ替えの活動を行った（第3図）。そ



第2図 ペアワーク活動



第3図 単語カード並べ替え

内容理解については、Step 1、Step 2は、生徒は教材を使用し、チャンクごとに並べてある英文を教員の音読を聞きながら默読し、内容に関する質問に答えた。教員の音読は、英語を苦手とする生徒に音と文字をリンクさせる機会を増やし、内容理解を助けることを目的とした。Step

第2表 段階的指導例

サマリー音読指導	
Stage 1 (一斉)	教員：日本語 生徒：日本語に合う英語を言いながら内容確認（チャンク単位）
Stage 2 (ペア)	A：相手に伝えることを意識した音読 B：相手の音読に傾聴・相づち（チャンク単位）
Stage 3 (ペア)	A：相手に伝えることを意識した音読 B：内容理解を伴った繰り返し・相づち（チャンク単位）
Stage 4 (ペア)	A：内容を理解しているか確認の音読・Bの繰り返しを確認 B：教材を見ないで相手の音読に傾聴・繰り返し（チャンク単位）
Stage 5 (ペア)	A：内容を思い出しながらの音読 B：相手の音読に傾聴・相づち（センテンス単位）
Stage 6 (ペア)	A：相手に伝えることを意識した音読・Bの繰り返しを確認 B：教材を見ないで相手の音読に傾聴・繰り返し（センテンス単位）
Stage 7 (ペア)	A：日本語を英語にしながら、語彙・文構造の確認 B：Aが合っているか確認（センテンス単位）
文法指導	
① (一斉)	黒板にカードを貼って、新出の文法確認（センテンス単位）
② (一斉)	文法事項を活用し、黒板にバラバラに貼った単語カードの並べ替え（単語単位）
③ (一斉)	はずすカードを増やしながらリピート（チャンク単位）
④ (個人)	リピートした英文を書く（センテンス単位）
内容理解	
Step 1 (一斉)	教員の音読を聞いて内容確認（パラグラフ単位）
Step 2 (一斉)	教員の音読を聞いて内容確認（パート単位）
Step 3 (一斉)	内容理解を伴いながら音読活動ができたか確認（パート全体）

3では、テキストを閉じて教員が言う英語を聞き、内容についての正誤問題に取り組んだ。この活動はその時間の音読活動直後に行い、内容理解を伴った音読ができたかどうかを確認することを目的とした。

### (3) 暗唱発表会

6時間目は、チームごとのサマリー暗唱発表会を実施した。サマリーをセンテンス単位で四つのパートに

分け、自分が言う順番ではないときは、暗唱する相手を見ながら、“Really?” “Exactly!” 等の相づちを返す、という方法で行った（第4図）。また、暗唱の最後に、単元の感想や日本にあったらよいと思う法律について二つから四つのセンテンスの英語で言う活動も行わせた。コメントを言うのは、代表でも、全員一緒に一人ずつでもよい、ということにした。以下に生徒が作成したコメント例を示す。



第4図 暗唱発表会

#### チーム1

We want a law to stop smoking.  
Smoke has a bad influence on our health.  
チーム2  
We are lucky.  
The law of Singapore is not in Japan.

#### 6 検証方法

検証授業前後に、新出語彙や文構造知識、内容理解を問う小テスト（学習定着度調査）を全く同じ形式で行った。中間試験直後であった検証授業前には、訳読・文法指導中心の授業で学習したLesson 6の内容について、検証授業直後には、検証授業で扱ったLesson 7について調査を実施した。また、検証授業前と検証授業直後にアンケートを実施し、英語学習についての意識の変化を調査した。この二種類の調査を基に、振り返りシートを加味して、生徒がどのように変容したかを分析し、考察した。

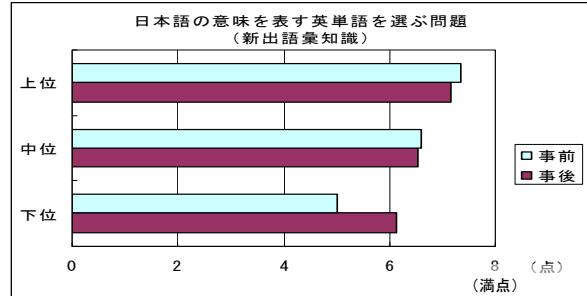
#### 7 検証結果

##### (1)学習定着度調査

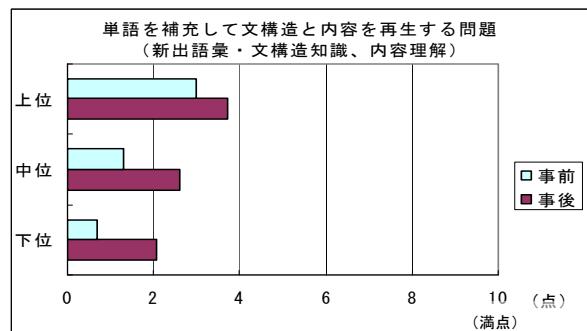
事前調査の合計得点を基に、全員の成績について、上位群37人、中位群37人、下位群36人の三つのグループに分け、各問題について、平均点を比較分析した（第6図～第8図）。

第6図は、日本語の意味を表す英単語を選ぶ新出語彙知識の問題、第7図は、単語を補充して文構造と内容を再生する、新出語彙・文構造知識と内容理解を見る問題についての結果を示している。これらの結果から、音読活動を中心とする授業を通して、新出語彙や文構造の知識定着を図ることができたと考えられる。特に下位群に顕著な効果があった。また、図には示されていないが、事後調査における内容を再生する問題については、音読を繰り返す回数が多かった前半の内容の正答率が高く、繰り返し音読することの有効性が認められた。

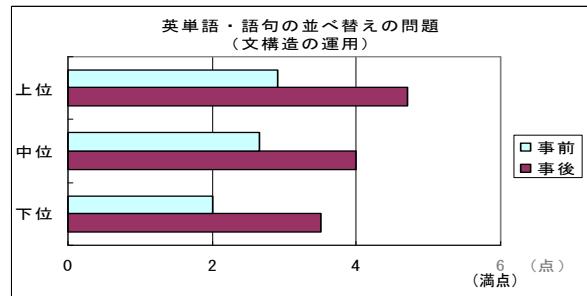
さらに、日本語を参考にして、英単語・語句の並べ替えをする文構造の運用についての問題も全てのグループで平均点が上昇した（第8図）。これは音読活動だけではなく、黒板に貼った単語を並べ替える文法確認の活動も効果があったと考えられる。



第6図 定着度調査①



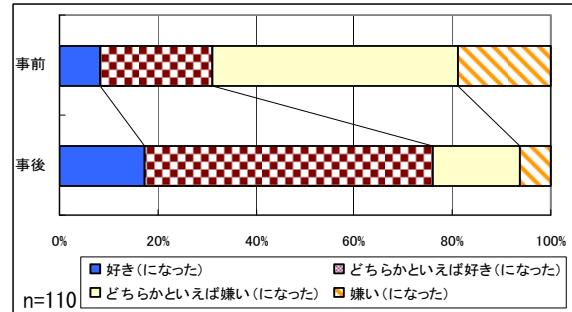
第7図 定着度調査②



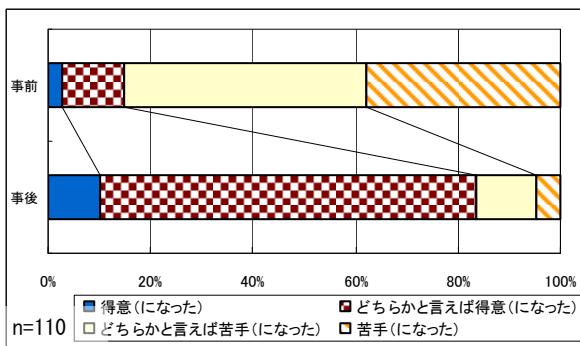
第8図 定着度調査③

##### (2)事前・事後アンケート

アンケート調査の中で、音読に対する意欲や自信を尋ねる質問についての結果（第9図、第10図）を見ると、全体として、活動を通して授業中に声を出すことへの抵抗感が薄れ、意欲が向上してきたと考えられる。

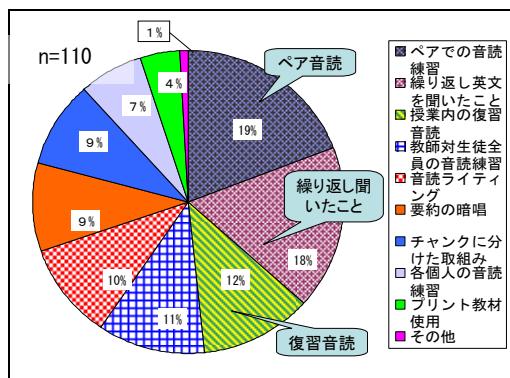


第9図 音読の好き・嫌いについて

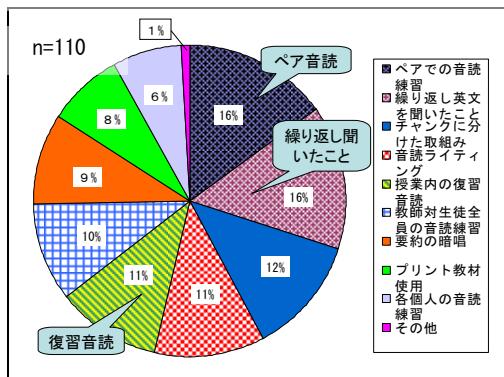


第10図 音読の得意・不得意について

音読をすることが好きかどうかの質問について、事前アンケートでは約70%の生徒が音読に対して否定的な回答でしたが、事後アンケートでは80%近くの生徒から肯定的な回答を得ることができた（第9図）。また、音読をすることが得意かどうかの質問については、事前アンケートでは約80%が否定的な回答であったが、事後アンケートでは80%以上の生徒から肯定的な回答を得られ、大きな改善が見られた（第10図）。



第11図 事後アンケート①



第12図 事後アンケート②

事後アンケートで、「授業の取組みの中で、単語・熟語を覚えるのに効果があったと思う活動は何ですか。主なものを二つ選んでください。」という質問には、最も多くの生徒がペアでの音読練習を挙げている（第11図）。「授業の取組みの中で、文法・文型を覚えるのに効果があったと思う活動は何ですか。主なものを二つ選んでください。」という質問にも、繰り返し英文を聞

いたこととともに、ペアでの音読練習を挙げている生徒が最も多く（第12図）、学び合いの効果が見られた。

また、この二つの質問について、「繰り返し英文を聞いたこと」、「復習音読」を選択している生徒も多かった。これはペアを組んで繰り返し音読することは繰り返し英文を聞くことにもなり、また、次の授業でもペアの形態を活用して復習音読を行うことで、新出語彙や文構造の知識定着につながったためだと考えられ、ペアワークの有効性を裏付ける結果にもなった。学習定着度調査の下位群・中位群の方が、上位群より「繰り返し英文を聞いたこと」を選んでおり、上位群は聞く回数が少なくとも理解につなげることができることを示唆している。さらに、上位群は家庭学習で行う音読ライティングを選択している生徒が多く、自立した学習者として英語学習ができることがうかがえた。

下位群はこの二つの質問について、教員との一斉音読練習をほとんど選んでおらず、チームのメンバーに支えられて音読活動を継続できたことが明らかとなった。

文法・文型を覚えるのに役立ったその他の活動として、チャンクに分けた取組みを挙げている生徒が多く、チャンク単位の音読活動やカード並べ替え等の活動が文構造の知識定着に有効であると感じた。

### (3) 振り返りシート

授業全体の振り返りシートの記述欄には、約90%の生徒から回答があり、学習全般について肯定的な回答は約88%あった。以下に肯定的回答の主なものを紹介する。

#### ア 声を出す意欲について

- 今まで発音したくても勇気がなかったけど、今回発音に気を付けて読むことは大切だと思った。
- どうせ読めるなら、かっこよく読めるようになりたいと思った。

英語を繰り返し聞いて声に出すことにより、音声面への不安が解消され、授業で声を出す意欲につながったと考えられる。

#### イ 音声以外の効果について

- 英文を声に出すと意外と頭に残るなあと思った。
- 繰り返し読むことで、内容理解度も高くなった。
- 文法を覚えやすかった。

繰り返しの音読は、音声面以外にも効果があることを体感し、認識できたことがうかがえる。

#### ウ 学び合う姿勢について

- 分からぬところは、チームで協力して教え合い、チームワークがよかつたと思う。
- みんなで頑張って練習したので、きちんと発表することができた。

ペアワークで音読活動を行い、暗唱発表会というチームの目標をもつことは、相互協力による学習効果をもたらすことが見えてきた。

## 8 研究の成果と今後の課題

### (1) 研究の成果

本研究では、音読活動を通して、英語Iの単元目標を達成させながら、授業で声を出す意欲を向上させ、新出語彙や文構造の知識定着を促して、発信力の基礎を築きたいと考え、授業づくりに取り組んだ。検証授業時には、基礎的な学習事項の理解や定着に不安があり、英語学習についても消極的な生徒が多い中で、ペアワーク等の活動における工夫を施し、単語からチャンク、そしてセンテンスへと段階を踏んだ繰り返しの音読活動を中心とした授業を行った。

その結果、段階的指導で行う繰り返しの音読活動を通して、声を出すことへの意欲を高めることができた。同時に、繰り返しの音読活動は、スムーズな音読を可能にするだけではなく、新出語彙や文構造の知識定着を促すことも事前・事後の学習定着度調査結果の比較から明らかになり、音読が言語の基礎能力養成に効果的な活動であることが分かった。学習定着度調査の成績について三群に分けた中で、音読活動はどの群にも有効な活動であるという手応えを得たが、特に、下位群の上昇率が高かった。したがって、音読活動を継続的に指導することで、更に声を出す積極性が高まり、学習意欲も向上していくと考えられ、発信力の基礎を形成する生徒の学習プロセスの道筋が見えてきたと思われる。

また、音読活動を支える様々な活動の有効性も確認することができた。小チーム内で互いにパートナーを交替してペアを組む形態の活用は、様々な学習効果をもたらすことも分かった。ペアワークによる少人数の活動は、声を出すことへの不安を解消するだけではなく、学び合う姿勢を引き出すことにもなった。特に下位群の生徒は、チームのメンバーに支えられて音読活動を継続できたことが、アンケート結果や振り返りシートより明らかとなった。さらに、チームごとの暗唱発表では、相手の話を聞き合う距離やジェスチャーを生徒たち自身でつくり出すこともでき、発信しようとする意欲の向上が見られた。暗唱後に英文のコメントを加える活動は、自らの考えを伝える試みにもなった。

以上のことから、今回の取組みを通して、発信力育成のための基礎づくりの一端を担うことができたと考える。

### (2) 今後の課題

音読を中心とした授業展開により、一定の成果を得られたが、課題も見えてきた。事後アンケートにおいて、「繰り返しの音読活動は英語学習への自信につながりましたか。」の質問について、肯定的な回答をした生徒は、全体で約60%であったが、下位群については、否定的回答も約半数あった。事前・事後の学習定着度調査を比較すると、下位群の上昇率は高かったが、自信をもつまでには至らず、発信する自信を大きく向上

させることはできなかった。

のことから、段階的な指導を一定期間にわたって継続的に行うことが必要であり、また、生徒が、音読の上達以外に音読の波及効果を実感できる仕掛けを、復習音読やカード並べ替え以外にも施すことが必要である。

今回の取組みを発信力の育成へつなげていくには、継続的な音読指導に加えて発表活動を継続し、ステップアップしていくことも大切だと考える。今後は、生徒がチーム内で互いの協力体制を深めながら、①自分たちで学んだ知識を活用して、相づちの後にワンセンテンス添えたりするなどの応答の方法を考えたり、発表内容を考えたりすること②発表に対する質疑応答を行いう即興性を発表活動に取り入れていくことなど、段階的指導を継続的に行うことが効果的だと考える。その際、教員の側もチームとなって、年間を見通した指導計画を立て、シラバスを作成し、発表活動のプログラムを開発したり、お互いの授業を見たりするなど、協力して指導体制をつくることが重要である。

## おわりに

本研究は、6時間という短期間の授業を通したものであったが、「発信力」の基礎形成のスタートとなる取組みを行うことができた。今後も研究を続け、実践を積み重ね、発信力育成へつなげていきたい。

## 引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 p. 110  
文部科学省 2010 『高等学校指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版 p. 6  
土屋澄男 2004 『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』研究社 p. 79

## 参考文献

- 門田修平 2007 『シャドーイングと音読の科学』コスモピア  
七野真希 2006 「実証的研究：パッセージの繰り返し提示と音読練習による重要語句・フレーズの再生への効果」（『第46回国語教育メディア学会全国研究大会発表要項集』）pp. 103-109  
鈴木寿一 2009 「『音読』こそがすべての基本—音読指導で生徒の英語力を向上させるためのQ&A」（『英語教育』2009年11月号）大修館書店 pp. 10-12  
村野井仁 2006 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店  
安木真一 2010 『英語力がぐんぐん身につく！驚異の音読指導法54』明治図書出版